

# 2010 年代以降の高校生における進路の男女分化過程の検討

## ——性役割観の多様な側面に注目したアプローチ——

広島大学 白川俊之

### 1 背景

高校生の進路分化研究において、近代的な性別分業を肯定する価値観を強く内面化した女子は、学業成績やアスピレーションを低下させ、結果的に男子に比べて低い学歴に至るとする説が主張されてきた。実証分析ではこの説と適合的な知見[小谷 1998; 中西 1998]と矛盾する知見[神林 2000; 元治 2004]の両方が報告されており、結果はやや錯綜している。さらに、先行研究は 2000 年頃までに行われたものが多く、近年の様相を捉えた分析が不足しているため、最近ではどんな状況になっているかに関して、詳しいことはよく分かっていない。

### 2 問いの焦点

性役割観が進路分化にとって、どのような意味をもっているかを、比較的近年のデータを用いて改めて検討してみるのが、この報告の目的である。「性役割の内面化がアスピレーションを形成するなら、社会化の主要なエージェントである親の性役割観が、高校生のアスピレーションに影響を及ぼすであろう」という、先行研究の指摘[宮島・田中 1984; 神林 2000]を踏まえ、母親の性役割観を独立概念、高校生の進路希望を従属概念と想定して検討をすすめていく。また、これまでの研究では性役割観の指標として「女は家庭、男は仕事」という狭義の性別分業規範に類する意識が使用されることが多かったが、本報告ではそのみならずジェンダー本質主義—男と女は得意なことが異なると見なす文化・信念—の影響にも注目し、分析を行う。ジェンダー本質主義は個人主義との親和性が高く、男女平等の価値観とも常に対立するわけではないという点で、狭義の性別分業規範とは区別される意識だと考えられている[Charles & Grusky 2004]。そのうえで、ジェンダー本質主義と「女は家庭、男は仕事」というタイプの意識は、若い男女の進路分化に対して、異なる効果をもつ可能性があることが指摘されている[Charles & Bradley 2002]。

### 3 分析方法

分析には「高校生と母親調査、2012」のデータを使用する。本調査は、全国の高校 2 年生とその母親を対象に、2012 年 11 月から 12 月にかけて郵送法による実査が行われたもので、1,070 組の親子ペアから回答への協力が得られている。有効回収率は 68.6%である。母親のもつ狭義の性役割観は「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」「女性も、自分自身の職業生活を重視した生き方をすべきだ」の 2 項目から操作的に定義した。ジェンダー本質主義は、母親が子どもに、どんな知識・技術を身に付けることを期待しているかを聞いた質問の結果から操作化した。高校生が進学を希望する学校段階と、進学したい学校の学部・学科・コースの 2 つを従属変数として設定した。サンプルを男女で分け、出身階層や学校の成績をコントロールし、母親の性役割観が子どもの進路希望に、有意な効果を示すかどうかを検討した。

### 4 分析結果

母親の性役割観と子どもの進路希望とのあいだには、有意な関係が見られた。ただし、両者の関係は性役割観の側面と、さらに進路希望のどの次元に注目するかによって変わることが確認された。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 17H06597 の助成を受けたものです。